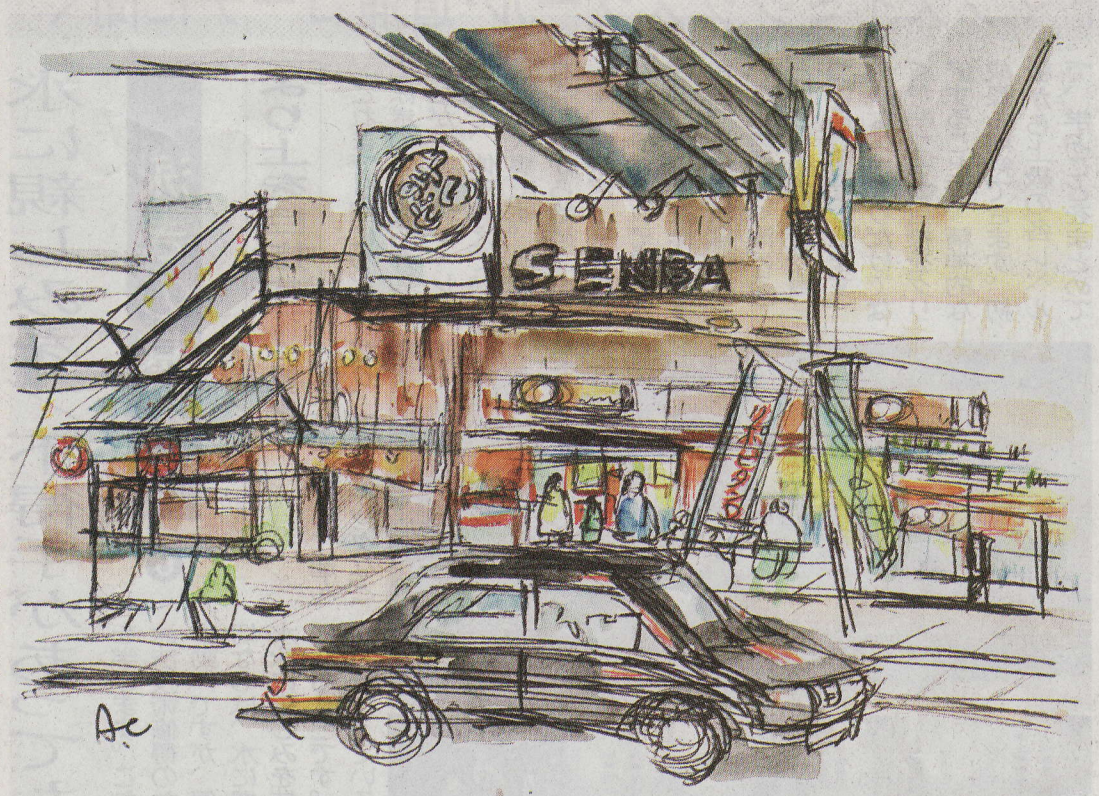
22

船場の起業家③　戦後の船場商人の証言

御堂筋ものがたり

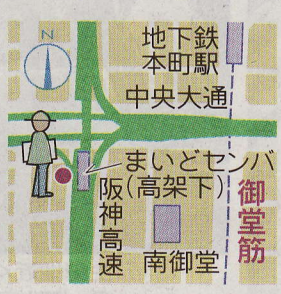
絵・文　熱田親憲



今や船場を知らない人も多いようだ。戦後生まれの世代には北浜や御堂筋を含む金融街、問屋街という方が、分かりやすいかもしれない。

日本の近代化とともに、水運のよい大阪、とりわけ土佐堀川に近い船場に、「御堂さん」の鐘の音を聞きながら商売をする近江商人らが集まってきた。問屋中心の船場の街も、終戦の年の3月に空襲で全焼した。

戦前・戦中の雰囲気を残す町並みはないかと探しながら、地下鉄本町駅15番出口を出て「うを清」「大西ビル」前を通りながら進むと、高速道路の高架下で「せんば市場」の看板に遭遇した。正面軒上の看板には「まいど」とある。現在の名称は「まいどセンバ」。市場の中には八百屋、乾物屋、酒屋など。隅には喫茶店が陣取り、庶民的な雰囲気である。喫茶店は近所のたまり場といったところ。まもなく、かっぽう「せんばうを清」の津田真治会長と総合卸売業「大西」の大西隆会長が店内に入って来られた。



遺伝子と人徳のなせる業

市場内の各店はかつて前の通りに軒を並べ、「大阪市公設市場」として大正時代から商売をしていたという。その後、戦中、戦後の統制経済を経て、終戦6年目の昭和26（1951）年、大阪市公設市場として再開。その時、すでに「うを清」は鮮魚商を、「大西」の前身の「大西衣料」は小売店を開業していた。偶然にも両店とも、両会長の母が担当されていた。

そのころ、「うを清」は旧唐物町の現在地で、仕出し業も開業していた。船場の繊維問屋が開く展示会や見本市に来る地方からの客を接待するなどして、会席弁当や会席料理の出前で大繁盛。20年間で今日の基礎を築き、今は「癒やし」の空間として人気を集めている。これも早期出店で有利に商売が出来たからという。

一方、「大西衣料」の先代会長の大西信平氏は、もともと伊勢商人であったが、昭和24（1949）年に大阪に進出し、住居を今の「うを清」の隣に置いた。昭和29（1954）年に店舗を今の船場センター9号館跡あたりに開き、セルフサービスによる現金卸の「大西衣料」の基礎を作った。昭和32（1957）年には貿易部を作り、長男の隆氏に東南アジアと米国への製品輸出業務を担当させて、単品種大量販売による安さを体験させた。

信平氏の近代的経営は更に拍車がかかり、昭和41（1966）年にはコンピューターによるオンライン・リアルタイムシステムを導入し、繊維問屋から生活雑貨を扱う総合問屋へ移行する基礎を築いた。隆会長は、繊維産業からファッション産業に発展させて「セルフ大西」の業態を確立し、一方で大型流通に直接納入する販路を開発した。らつ腕ぶりは、やはり先代の遺伝子と人徳のなせる業であろう。